

実際に行ったから得られたもの

A班 山梨学院大学 石原 桃香

今回の山東省訪問を振り返って、まず一番最初に思いつく事は「人生が変わる経験ができた。」ということです。

私は高校1年から今現在まで4年間中国語を学んできました。しかし、実際に中国に行き、中国語を話す機会がくるなんて夢にも思いませんでした。私は日本から出たこともなく、海外へ行くことも初めてでした。なので、楽しみな気持ちもありましたがそれ以上に不安な気持ちが大きかったです。しかし、手厚い日中友好協会の皆さんや現地ガイドさんの補助、現地での暖かい歓迎、一緒に行動を共にした団員の皆さんのおかげで安全に楽しく様々なことを学びました。また貴重な経験を沢山出来ました。

今回の訪中で特に印象に残っている所は、泰山です。私自身運動が苦手な泰山に登ると言う話を聞いた時は頂上まで行くことは無理だと思っていました。しかし、友達や団の方々と声を掛け合い全員で頂上まで行き観た景色は、生涯忘れることがないと思います。日本でみる景色とまた違う中国の広く広がる景色はとても綺麗でした。頂上まで登りきることが出来た達成感も何にも代えがたいものでした。また、ロープウェイでの移動の際になかなか話すことの出来なかった団員の方々とお話できたことも嬉しかったです。

もうひとつ印象的だった所は HISENSE(海信)の見学です。ここでは、中国の最先端技術を目の当たりにしました。中国の電気機器はここまで進化しているのかと驚かされるものばかりでした。自分自身、最先端を追っていたつもりでしたが、まだまだ知らなかった先の技術が沢山ありもっと勉強したいと思われました。

山東省訪問を通して全ての経験は行動してみないと分からないと痛感しました。日中関係は良くなりつつありますが、まだ問題があります。その中で中国に対してあまり良い印象を持っていなかった部分も中国へ行く前は少しありました。しかし、行って見て現地の人みんな良い人ばかりでした。中国語が使えなくても読み取ろうとしてくれたり、日本に興味を持ってくれてる人も多くいました。その事実は行かなければ分からないものでした。また、今回の訪中で得られたことも実際に行って、観て、食べて、体験して感じないと分からないことだらけでした。

今回の経験を生かして、もっと中国語の勉強を頑張りたいと思いました。そして、中国への関心を高めていきたいです。留学生や観光客の中国人に中国語で話してみたり、どんどんコミュニケーションを取っていきたくて強く思いました。国間の友好を築く為にも重要なことですが、まずは自分の為にもっと中国について学んでいきたいです。最後になりますが、今回のプログラムを企画・運営してくださった日中友好協会の皆様をはじめとする多くの方に深く御礼申し上げます。

中国との関わり

A 班 香川大学 池上 遥

自分の中で中国への関心が広がっていた矢先に、今回の訪中の機会をいただくことができ、無事に帰国し貴重な体験ができたこと、また今回の訪中に携わっていただいた方々に感謝の意を表すとともに、今回の訪中を終えて考えたことを、自分が中国に関心を持った経緯を踏まえながら執筆していきたいと思う。

私の中国への関心が大きく広がったのは、大学生になってからである。中国への関心が広がった理由として、大学での中国人留学生との交流が一つ挙げられる。高校の世界史で習う知識や、日本のメディアから得る情報から、それまで中国という国に対して、共産主義の大国であり、未知で謎多き国だと感じていた。大学に入って実際に中国人留学生と関わるようになると、中国の生活などといったリアルな話を聞く機会が増え、中国に興味を持つようになった。またそれと同時に、中国人留学生の日本語の堪能さに非常に驚いた。自分の実現したいことに挑戦し、異国の言葉を覚え、異国の地で頑張っている中国人留学生の姿を見て、感銘を受けた。しかし一方で、日本人としてこのままでは絶えず努力している中国人に何もかも追い抜かれてしまうのではないかという危機感も感じた。経済力においては既に抜かれてしまっており、今後の日本を背負っていくのは私たち日本人だけでなく、日本に留学している留学生たちも含まれてくるのではないかと思った。だからこそ、今後の平和な将来を考えるにあたって、韓国、中国などといった隣国諸国との友好関係を築くことはとても重要なことなのではないかと日々感じていた。

そうした大学生活の中で中国への関心が広がり、今回の訪中の機会を手に入れたわけであるが、今回の訪中では、短い期間ながらも実際の中国を垣間見ることができ、とても興味深い体験となった。日本にいる中国人留学生と交流するのと、自分たちが訪問者として現地の中国人の方と交流するのとでは、違った立場から中国の方と関わることになったが、中国の方は非常に親切に接して下さり、好印象を持つことができた。今回の訪中の中で、文化遺産、自然、人、技術力や経済力など、様々なものを見て体験し交流したわけであるが、規模が大きく、人口も多いため、中国は可能性に溢れている国だと感じた。今現在においてもそうだが、これからの将来においても、社会や経済分野の側面における協力関係ないし友好関係を日本と中国が結ぶことは、グローバル社会における日本の立ち位置を考えるにあたって必要不可欠であると感じている。友好関係を築くためには、相手への敬意を示すことが重要だと考えるが、今回の訪中で得た知識や経験をもとに、中国の方と接する際には相手国への興味と敬意を示すことができると思うので、今後中国の方と交流するときには、今回得た経験や知識を踏まえて仲を深めていけたらいいなと考える。また語学に関しても、今回の訪中の中で中国語の学習に励む日本人学生と交流し、刺激を受けたと同時に、自分も中国語の学習に挑戦してみたいという気持ちになった。

私たちが今回訪問したのは山東省の一部であったが、中国は様々な興味深い箇所が数多くあり、土地も広いため、今後も中国への関心を持ちつつ、中国に対する理解をより深められたらいいなと思った。今回の訪中の中でお会いした様々な方々のご縁に感謝しながら、今回の体験を糧に日中友好に貢献できる一員になれるようこれからも頑張っていきたいと考える。

訪中レポート

A 班 横浜国立大学 伊藤 広登

この6日間は、私にとって初めての訪中となり、毎日が新たな発見の連続であった。中国のイメージも大きく変わったとともに、また中国に行ってみたい、中国についてさらに勉強したいと思える渡航となった。中でも特に、中国における文化的信仰の対象としての泰山の存在や、現地の方々との交流から学べたことは多くあった。今回は主にその2点について記す。

泰山はその美しさや漢詩で耳にしたことがあり、以前から行ってみたい場所であった。そのため今回の訪中では念願叶って行くことができた。当日は天気も快晴で眺めがよく、登山道からは泰安市の雄大な景色を見ることが出来た。壮大な自然を物語る武骨な岩肌、木々の生命力、一面に広がる雲海、綺麗な青空等、見渡す限り中国の自然を満喫できた。そして道中には石碑やお寺などもあり、多くの中国人が参拝したり写真を撮ったりしていた。中国人にとって泰山が文化的な信仰の対象となっていること点を感じた。今ではそうした点が評価され、文化遺産と自然遺産の双方の要素をあわせ持つ複合遺産としてユネスコの世界遺産に登録されている。複合遺産は世界全体でも10箇所しかないとのこと、大変貴重な名所を見学することができた。

また現地の方々と話して交流できたことも、この訪中での貴重な体験のひとつである。中国語を勉強してきたものの、実際に会話してみると中国語の発音が難しいこともあり、なかなか上手く伝えられなかった。それもひとつの学びであり、今後の中国語学習に活かしていきたいと強く思った。

山東大学での現地大学生との交流では、現地の日本語学科の学生の日本語力に驚かされた。曲阜師範大学では現地大学生が中国の伝統文化について紹介してくれたほか、実際に体験して伝統文化に触れられた点も大変勉強になった。また青島での現地の方々とお話できたことが大変印象に残っている。青島は日本語が話せる中国人の方々が他地域よりも多かったと感じた。実際にホテルのスタッフの方や青島のお店のスタッフの方などが、日本語を使ってコミュニケーションを取ろうとしてくれた。それ自体がとても嬉しかったし、同時になぜ青島の方々は日本語を話せるのかが疑問に感じた。お話を伺ってみると、青島は海沿いで異国の文化が入ってきやすかった点や日本が一時期青島を所有していた点など、様々な要因が関係していることがわかった。青島在住の日本人の方も1000人弱ほどいらっしやるということであった。さらに日本語を話せるようにするため日本語学校に通ったという中国人のお店のスタッフの方もいらっしやった。中国における日本人やその文化との共生、受容を学ぶことができた。私は大学で日本における中国人を始めとする他民族との共生のあり方を学んでいるため、通常とは逆の視点から見た共生の形に気づくことができた。

この訪中では多くの新しい発見を得ることができた。この新しい発見を1つの視点として、今後の大学での学習や研究に役立てていきたい。

実際に体験してみることの大切さ

A班 香川大学 猪塚 敦智

訪中前は、初めて中国に行くことに対する期待と不安があった。大学で中国人留学生の友人がいるため、中国に対して興味があった。しかし、ニュースなどであまりよくない話を耳にする機会もあったために、不安も同時にあったというのが正直なところだった。

実際に中国に行ってみると、現地に行かなければわからないようなことを多く学ぶことができた。その土地でどのような暮らしを人々が営んでいるのかを理解するためには、映像などの二次資料だけでは不十分である、ということを経験した。空気や音、その空間に居ることで抱く感情など、自身の身をもって体感したからこそ得られた貴重な経験だと感じている。街によっては、バイクを利用している人が多いなど、その街の地理的な特徴により、日常風景が大きく変わるのとはとても興味深かったと感じた。

大明湖は、日常の忙しさを忘れさせてくれる程のゆったりとした雰囲気であり、リラックスするには最適な場所だと感じた。また、大明湖の文字一つ取っても歴史的な話が裏に隠されており、興味の尽きない場所だと感じた。

泰山においては、自然の雄大さを感じるとともに、歴史上の出来事を肌で感じる事ができた。歴史と自然を満喫できるため、何度でも訪れたい場所だと感じた。歴史的な建造物は日本にも数多く存在している。しかし、それぞれの国の歴史はやはり異なっているため、中国の歴史を学ぶならば、中国の現場を訪れて体感する、ということが非常に大切だと感じた。

孔子廟では、孔子が中国においてどのような存在なのか、ということを経験することができた。敷地面積の広さにまず驚くとともに、孔子が受けた待遇とその子孫への関心を知り、孔子がいかに尊敬されていたのか、ということを経験として学ぶことができた。論語を小学校で習うなど、孔子の教えとの関りは幼少の頃からあったけれど、その存在がいかに偉大であるのか、という点については、あまり理解できていなかったように思う。しかし、孔子廟を訪れ、そこにある様々なエピソードを知ることで、以前よりも孔子に対する理解が深まった。このような偉大な人物が生まれた土地である中国という国に対して敬意を抱くとともに、隣国・隣人として共に学び続けていきたいと感じた。

青島の全自動化埠頭見学では、中国の技術力の高さを学ぶとともに、環境意識の高さを学ぶことができた。中国の技術力が高いのは、ニュースなどで情報としては知っていたが、全自動化埠頭を実際に見学することで、その技術力の高さを経験として学ぶことができた。お互いの国の優れている部分は積極的に学び取り、日本と中国が切磋琢磨して、今後より発展していけるような、良好な関係を築いていきたい。

青島ビール博物館見学では、青島ビールが作られるようになった歴史的な背景を学ぶとともに、青島ビールが地元の人々にとってどのような存在であるかを学ぶことができた。

青島ビールを飲めるという店が多くあり、人々の生活の一部となっていることを感じる
ことができた。

今回の訪中では、多くのことを学ぶことができた。この学びは、ネットや書籍からだけでは決して得ることができない、貴重なものだと感じている。この訪中により、もう一度中国を訪れたい、という気持ちが強くなった。今回の経験を決して忘れることなく、日中友好の活動をしていく糧としていきたい。

中国に対するイメージの変化

A 班 明海大学 植田 琉聖

私は今回訪中団として中国に訪問したのが初の訪中でした。私自身大学の中国語学科で中国語を学んでいることや、中華料理屋でアルバイトしていること、ニュースの知識などで中国に対して様々なイメージがありました。今回の訪中は私にとって今現在中国に対して持っているイメージの答え合わせができるいい機会でした。

まず私が訪中前に持っていた中国に対するイメージですが、国民みんな愛国心が強いことや、友達や家族に対して愛情深いことなどいいイメージも多くありましたが、空気が汚くかすんでいたり、食事やホテルなど衛星面も少し不安であったり、マナーを守れないことなど、正直なところマイナスのイメージの方が強かったです。ほかにも、社会主義の思想が強いことや見ず知らずの他人には冷たいなどといったイメージも持っていました。

実際私が中国に行ってみて感じた一番大きなことは、思っていた以上に社会主義の思想が強いということです。空港や孔子廊、街を走るトラックにまでも「社会主义核心价值观」という3項目で12単語が書いてある看板や旗が見られました。少しはあるのではないかと予想していましたが、予想をはるかに上回る数で驚きました。また、街の工事現場や青島港自動化埠頭、泰山に行くまでの裏路地のような場所にまでも習近平国家主席の言葉が大きな旗で飾られていたり、男子トイレの小便器に「向前一小歩，文明一大歩」という表記や、街の工事現場のフェンスに「文明是一种尊贵，文明是一种崇高」という看板があったりして、国民全体で文明進歩をしていく意思表示のように感じられました。

また、私たち訪中団がとても歓迎されているように感じました。正直、観光客や外国人には冷たく接するような勝手なイメージがありましたが、本当にそれは思い込みだったことに気づかされました。泰山で警備員の方や売店の方が気さくに話しかけてくれたり、飛行機で隣になった現地の人、食事会場の人、バスガイドさんなど、この旅で私たち訪中団に関わってくれたすべての人から優しさと思いやりを感じ、中国の方に対する印象がいい方向に大きく変わりました。

そして、隣国ということもありますが、中国人に対して偏見を持たずに接するべきだと強く感じました。日本人の多くはイメージに大きく影響を受けてしまったり、大衆の意見に流されてしまいがちですが、いいイメージがなかったとしても実際に現地へ足を運び、自分の目で見たり体感をして判断することが大事だと思いました。

この6日間はとても刺激的で、新しく出会った同年代の学生達と中国山東省に行き、いろいろな体験をさせてもらうという、私にとっては毎日ワクワクが止まらない日々でした。この訪中団で出会った多くの方が何かに挑戦しており、日中交流はもちろん、日々交流からも刺激を受けました。大学入学以降中国語を勉強してきてずっと中国に行くのが夢だったので、今回このような形で夢がかなって本当にうれしかったです。今回の訪中で学

んだことを今後の生活に活かしていきたいと思います。今回は本当にありがとうございました。

身に染みて感じた「信念」

A班 法政大学 岡村 未瑠

今回、山東省へ訪問して数えきれないほど多くの学び、刺激があった。中でも印象に残っているのは、孔子さまを敬う思想の影響力だ。

山東省といえば孔子さまの生まれた地であるということは、中国について勉強途中である私でも知っていて、中国のなかでも文化的象徴なこの地に今回訪れることができて光栄だ。以前の魯と齊が今の山東省であるが、ふたつの地名のうち山東省の略称が「魯」であるのは、孔子さまの故郷であるからだという。このことをガイドさんが繰り返し伝えてくれたたり、山東省全域でナンバープレートに魯と記載があつたりすることから、中国人にとっても孔子さまの存在が重要なことだと感じた。しかし、この時の想像を遥かに超える孔子さまの影響を、3日目に見学した世界遺産の孔府・孔廟で感じた。

孔府・孔廟に入っすぐ、警備の厳しさや人の多さ、そして敷地の大きさに驚いた。更に印象的だったのは、門や壁にある複数の孔子さまの素晴らしさを伝えることばたちだ。例えば、「生民未有」の意味は、「生きている人間のなかに（孔子さまのような素晴らしい人間は）未だだれも居ない」であり、「萬世師表」の意味は「(孔子さまは) 万人すべての人の先生である」だ。孔府・孔廟がつくられた当時、孔子さまはどれだけ尊敬されていたのだろうと思った。そんな孔子さまは、富を得られたのはみんなのおかげだと考えていたり、欲にまみれた醜い動物にならないように考えていたり、とても謙虚な人であったと学んだ。

また、孔子さまについて興味深かったのは、生きている当時は知名度も人気もそれほどなく、亡くなされた後にここまで尊敬されるべき対象になったという点だ。当時の皇帝が、国民をまとめて自分の地位を守るためには、一人の敬うべき先生の存在が必要であったがために、孔子廟が立てられ孔子さまの考えが広まったと学んだ。そこから、人々は、なにかを信じ、崇拝することで、生きる道しるべや生きる意義を再確認し、それが国としての団結に繋がったり、国民性の構築が実現したりすることを学んだ。中国というとても大きな国がひとつの国家として団結し発展を続けているのには、孔子の教えとそこから派生した性格やアイデンティティが関係しているのだと感じた。

宗教的考えは人々の行動、思想に強く影響を与えるものであるため、それらへの理解を深めることは人間の行動心理への理解にもつながると思う。日中友好への一歩として、中国における信仰心や思想について、日本との比較も含めてさらに学びを深めることが必要だと感じた。さらに、現在大学で社会問題などを学んでいるが、そういった問題の解決や世界の未来について想像するにも、宗教について考えることが必要不可欠だと考える。人々がどのような思想を持ち生きているのか、大事にしていること、譲れないことは何なのか、宗教的側面から多くの人の内面を理解することで世界全体の理解へ繋がると信じて

いる。

今回の訪中で、過去の人も含め多くの「人」について考え、接し、交流することができた。自分とは大きく異なる点を感じたり、同じ点を感じたり。別の国に生まれていても、心を通わせることができることも実感した。人々が内側に秘めている信念のパワーを感じたため、今後ももっともっと勉強していきたいと精力が湧いた。そして、広大な中国はまだまだ学ぶべきこと、魅力にあふれていると思うため、また訪れて多くの人と触れ合いたい。まだ見ぬ中国への期待が、更に高まる訪中となった。

初めての訪中を終えて

A 班 筑波大学 鬼澤 百香

昨今の処理水放出によるトラブルなどの原因をはじめとし、日本の中国に対するイメージは正直良いとは言い切れないものとなっている。訪中前は日本のメディアからのみ中国に対する情報を得ていたため、私自身も中国に対するマイナスな印象が0というわけではなかった。しかし、「百聞は一見に如かず」という言葉にもあるように、メディアを通さず一度自分自身の目でありのままの中国を見たいという気持ちが、私を本訪中プログラムへの参加へと促した。実際に中国を訪れると自然の規模感や国全体の成長速度、私たち訪中団に対する想像を絶する歓迎の手厚さなどに圧倒された。特に歓迎の手厚さに関して、私たちは毎日非常に豪華なホテルに宿泊させていただき、食事も毎食食べきれない量の食事を用意していただいた。今回のプログラムを最初から最後まで丁寧に案内して下さった現地のガイドさんは、私たち学生のホテル周辺で買い物をしたいという要望をくみ取ってくださり、ボランティアで夕食後に買い物の付き添いまでして下さった。中国の大学生たちは私たちが大学の教室に入ると笑顔で迎えてくれただけでなく、中国の伝統的な楽器で演奏してくれたり、漢服を私たちに着させてくれたり、中国を象徴するパンダのおもちゃをくれたり…と至れり尽くせりの対応をしてくれた。

私はこれらの経験を踏まえて、中国人に対して日本のメディアのフィルターを介さずに隣国に住むただの隣人として、偏見を持たずにこれまで以上に友好的に接していきたいと考えた。日本全体としても、このような日中友好プログラムを盛んに行うことでよりよい関係性を築いていくべきであるし、私たちのようにプログラムに参加した者たちには彼らの私たちに対する対応がいかに素晴らしいものであったかを日本に伝えなければならないと感じた。

今回の6日間の訪中プログラムは確実に私が異文化理解を深め、柔軟性を身につける一助となった。訪中プログラムの中で一番印象に残っているのは中国の大学生との交流である。中国の大学生と触れ合う中で、彼らの温かさと親しみやすさに非常に感動した。彼らは自分たちの文化や生活を分かち合おうとし、常に笑顔で迎えてくれた。この経験を通して、他者とのコミュニケーションにおいて、心からのやり取りがどれほど重要であることを学んだ。また、言葉の壁がある中での交流では、言葉だけでなく、表情や態度がコミュニケーションにおいて重要な要素であることを再認識した。相手を尊重し、理解しようとする態度が、コミュニケーションの障壁を乗り越えるのに役立つことを感じた。短い滞在期間ではあったが、中国の学生たちとの交流を通じて確かに友情を築くことができた。異なる背景や言語を超えた友情は、人生において豊かさをもたらすものであり、国際的なつながりの重要性を強く感じた。総じて今回の訪中は、私の人生に深い感銘を与え、異文化理

解や国際的な人間関係の重要性を強く認識させると同時に、私にとって宝物のような経験となった。

日中友好について

A班 明海大学 木下 萌々花

中国は今ビザを発行しなければいけなかったり、電話番号が無いとWiFiが使用できないなど外国人の旅行先には少しハードルが高い。また国に対して「怖い」と思っている人も多いのではないだろうか。私は、そのようなイメージを払拭したいと考えている。日本と中国は共に支え合うことができると信じている。今回の訪中団を通して、日中友好の未来は明るいと感じた。

日本のアニメや漫画、文化を通して日本が好きな中国人は多い。実際山東大学の学生と交流した際にも、コナンやドラえもんが好きな学生がたくさんいた。私たちの中には中国語が話せない人もいたが、互いに連絡先を交換している人もいた。学生たちが日本語を話すのが上手で、垣間見える日本語学習への熱意も感じる事が出来た。私が知り合った中国人は、日本語学科の生徒ではなかったが、何とか会話を続けることが出来た。会話中聞き取れなかったり、意味がわからず聞き返してしまうことがあったが、簡単な中国語に変換して私に合わせてくれた。しかし言語が通じるか分からない、日本人との交流がまだ思うようにできなかった不安や緊張でご飯をあまり食べれなかった。それを見た中国人の学生が「何を緊張しているの？いっぱい食べな！」と声をかけてくれて、おかずを私のお皿に盛ってくれた。言葉をかけてくれるだけではなくて、私が1歩先に進めるように手助けをしてくれた。私はその時中国人の優しさやおおらかさに触れ、幸せな気持ちになった。旅行中に何度も中国人の思いやりや優しさに触れ、心が温かくなった。また中国人の文化を尊敬する姿勢にも感動した。青年交流会では学生が楽器を演奏したり、書道や漢服姿を披露してくれた。その際に、中国は「らしさ」を強く維持している国だと私は思っている。そして文化を継承する若い人がたくさんいる。私は今まで日本「らしさ」を外国人に指摘されて、やっと日本の文化に気づくことが多かった。そのため文化継承にも積極的な中国人を直接見たことで、日本の文化も大切に継承しなければと気付かされた。

中国人と接しなければ分からないことはたくさんあるが、日本人全員が中国人と接する機会は多くない。そのため中国への固定されたイメージが、中国を遠ざける要因にもなっていると思う。そこで私は、中国と中国人の素晴らしさを広めたいと強く感じた。歴史的な原因で、中国に対して良いイメージを抱いていない人もいるかもしれない。しかしそれは過去のことであり、イメージは常に更新されていくべきである。そしてその手助けができるのは、中国語学習者や訪中団に参加する熱意がある人達だと考えている。もちろん私達も中国を全肯定するだけではなく、客観的に見ていく必要がある。そうでなければ日本と中国が手を取り合っ、お互いに意見を出し合いながら関係を改善していくことはできないだろう。今は戦争が起こる気配はなく平和だと勘違いしてしまいやすい。しかし今何も起こらず生活できているのは、少なからず私たちが生まれるずっと前から日中友

好を促進してくれていた人がいるからである。今回の山東省で出会った人達との縁を大切にし、私も日中友好を支えられる存在になりたい。

訪中を終えて

A 班 四国学院大学 木下 琴仁

訪中を終えて中国と日本の文化や人々の考え方の違いに多く驚き、学んだ。例えば、大明湖で若者が蹴鞠のような遊びをしていた。日本では若者が日常的に河原や公園で遊ぶ姿は現在あまり見ないと感じる。また、ショッピングモールの中にあったスーパーで魚や野菜がパックや透明の袋に入っていないことに驚いた。日本でもし商品が裸で売っていたら衛生面で問題になるだろうと思い、日本ではあり得ない状態だろうと思った。山東大学で交流したときに仲良くなった王さんは物事をはっきり言う人で他にもファンファンさんの話を聞いて5日間を通じて意見をはっきり発言している場面が多くあった。これらから、中国の人は物事をはっきり言う人なのだと学んだ。日本人は思ったことがあってもその場では言わず、裏で影口を言うので陰湿な日本人の方が性格悪いなと思った。

中国を訪れる前の中国に抱いていたイメージと実際訪れて過ごして違いに驚いた。中国を訪れる前のイメージはトイレは入るのにお金が必要である、日本より英語の教育がすすんでいる、中国のホテルには荷物に施錠をしなければ部屋に勝手に人が入ってきて物を盗んで行く物騒な国などで今、ニュースで今注目されているとトコジラミの蔓延の恐怖などであった。しかし、中国のトイレはすべて無料だった。泊まったホテルのスタッフやコンビニの店員すら英語が話せなくて英語が苦手な自分よりも相手とコミュニケーションが取れなくて困った。ホテルも人が勝手に入った形跡もなく、ホテルのベットの隙間にトコジラミの血糞もなかった。宿泊したホテルがとても良いところだった為泥棒やトコジラミがいなかったかも知れないが噂は所詮噂なのだと思った。

私は、これから隣国の中国との付き合い方としてまずは相手の文化と国民性をしっかり理解することが大切だとこの6日間で感じた。この訪中で海を挟んだ隣国なのにも関わらず国民性、文化、などの自分たち日本での当たり前が通用しないことが多かった。また、中国に対してのイメージが悪く、現実と大きく違った。なぜこのような偏見ができたのか考えた。私自身ニュースで政治に関する中国の情勢などは知っていたが中国そのものの文化や中国の国民性など政治という外側だけを知るのではなく、中国の正しい文化や内部の情報を知り誤解や偏見を減らしていくことが大切だと思う。

この6日間で自分の人生にとって変化があったと言えるだろう。まず私は、今回の訪中が人生で初めての海外だった。パスポートもビザも取得したことがなかった。日本から出たことのない私は日本語の通じない世界は自分にとっては新鮮で未知の世界であった。この6日間の生活や目にするもの、耳にするものすべてが学びであった。これらは私の人生において考え方や知識の面において影響をさせたと思う。

訪中での体験はただ観光するだけでは決して味わうことのできない体験だった。この体験をただ楽しただけで終わらすのではなく、中国とのこれからの付き合い方を改めるきっかけとしていきたい。

訪中団感想レポート

A班 高崎経済大学 木村 里菜

今回の訪中団に参加することが出来たのは、私にとって非常に幸運なことでした。群馬県日中友好協会に所属する中で、大使館に伺ったり、中国からのビデオメッセージを拝見することはありましたが、実際に訪中することは大学生の間には難しいのではないかと考えていたからです。また、出発前には一緒に行く大学生達と仲良くできるのか非常に不安でしたが、彼らは私にたくさんの気付きや刺激を与えてくれました。私の周りにはこれほど中国に興味関心を持ち、実際に学ぶという行動に移している人は中々見つかりません。私はこの訪中団の中で、日中両国の学生を見て、大学生というのはこれほど貪欲に学び、また動き出す活力を持っているのかと初めて知りました。つまり、同世代の大学生との交流はこの訪中団での経験の中でも最も大きいものでした。

訪れる前から楽しみにしていた泰山・孔子廟は想像以上に素晴らしいものでした。ガイドを務めて下さった馬さん・楊さんのおかげで、こうした観光地についても知識を持ったうえで楽しむことができました。泰山の頂上から見た景色は、私の人生の中でも忘れることのできない光景です。

しかし、私の記憶に残っているのは、そうした観光地だけではありません。今こうして振り返ってみると、街中にあった何気ない物や、中国の学生との雑談の中で生まれた笑い、スーパーで見かけた面白いお菓子など、一つ一つが鮮やかに思い出されます。中でも、中国の大学生や訪中団の中で出会った山東省の方々のあたたかいもてなしは、わたしたちの想像を超えるものでした。出会う人一人ひとりが、日本と中国の未来のために、我々に大きな期待をかけてくれていることがわかりました。私たちの日中・中日交流は、この五泊六日の中で終わったのではなく、むしろこの訪中団がきっかけになったと思返せるよう、我々も中国への関心・学習意欲を絶やさないようにしたいと思います。そのためには、今回の訪中団で出会った大学生の仲間達も、それぞれの場所で日中・中日の交流の種を育てているということを忘れないようにしたいです。

最後に、今回の訪中団のために尽力して下さった日本と中国の全ての方々に御礼申し上げます。

友好の使者

A 班 高崎商科大学 木村 日菜乃

12月5日から12月10日にかけて、日中友好協会訪中団として中国の土地を訪れた。これを経て、私が中国に抱いていたイメージは180度違うものとなった。特別中国という国に悪いイメージを持っていただけではない。ただ、浅識である国に対して「怖い」というイメージは確実に私の中にあつたものである。思えば中国に関する報道はマイナスなイメージを持たせるものばかりではないだろうか。最近の例を挙げれば、福島第一原子力発電所の処理水放出に関するニュースは日本でも度々取り上げられていて印象深い。メディアは中国に対し批判的な報道が多く、身近な日本人は中国に対して「怖い」という印象が強い。それが私の中国に対する印象であつた。

事前研修に参加した際、訪中団に参加する大学生がみんな中国に関心を持っているか、中国に関する学習をしていて驚いた。私は中国語もろくに読めず、中国に関する知識も高校で学習したものを最後にメディアなどからしか得ていなかった。そもそも他の人とスタートラインが違うことに参加してから気づき、怖気付いた。自信がないまま当日を迎えた。しかし、拍子抜けした。中国語を話せない私に対して、誰もがとても優しく接してくれたのである。それは交流した中国の大学生や、訪問先の企業の方、宿泊先だけでなく、一般市民の方も同じだった。嬉しくなった私は付け焼き刃の中国語や拙い英語でたくさん質問をした。ショッピングモールにいた犬の名前を聞いた。笑って名前と犬種まで教えてくれた。もちろん同行してくれた訪中団の友人に助けられた部分大きいですが、誰もが親切丁寧に対応してくれた。この国に初めて直に触れた私にとって、とても嬉しい出来事だった。

私は直接中国を訪れる機会を頂き、中国文化を学び、伝統を見て経験し、中国の食事を食べ、交流し、間接的な情報から得るものではない自分自身のまっさらな「中国に対する印象」を捉えることができた。この経験は、何にも変え難い有意義なものであつたと自信を持って言える。

今回の経験で得たものはどれも鮮烈で忘れがたいものであるが、特に忘れられないのは現地でガイドをしていただいた方のお話である。彼女は小さい頃に日本語に興味を持ち独学で勉強していたが、周りの大人に止められ隠れて日本語の勉強をするようになった。社会人になり、観光業に携わるようになってからはたくさんの国の人々と会話をした。もちろん日本人も。彼女は、私たちにこう言ってくれた。「正直、今の日中の関係は政治的に良い状態とは言い難いです。戦争を経験した中国のお年寄りの方々は、日本に対してあまり良い印象を持っていない方もいます。でも、これからもっともっと日中の関係は良くなります。こうして中国を訪れ、たくさん友好していけば良くなります。だからみなさん、今回の旅を忘れないでください。」私はこの話を聞いて大変感銘を受けた。また、今回訪

中団という日本の代表として中国の地に立っているのだという重みを感じた。この言葉を胸に刻み、再びこの6日間を振り返ると大変素晴らしい日々だったと思う。そして、これからの私の人生にも多大な影響を与えるものである。

隣国であるにもかかわらず、私たちの間にはさまざまな壁がある。それは歴史や、文化や、政治や、思想などでできたものである。しかしこの壁は、決して障壁ではない。今後どのように隣人と付き合いしていくのかは若者である私たちが体現するものである。私たちが見て、感じて、他の人に伝えることが歴史となる。偏見や先入観を捨て、自分自身がどう感じるかが何よりも重要であると、今回の旅で痛感した。

帰国後、大変お世話になったガイドの方にお礼を伝えるメッセージを送った。丁寧な返信の文末には、「私たちは必ずどこかで再び出逢って、一緒に中日両国の友好の使者になりましょう」と添えられていた。

最後に、今回この日中友好協会訪中団の企画を遂行するために尽力してくださった全ての関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

コロナ禍を乗り越えて成長できたこと

A 班 四国学院大学 栗田 咲来

大学生になりコロナ禍の自粛が緩和され、新しい自分探しと新しいことに挑戦してみたいと思い、また他大学の学生との日々交流や日中交流を通して自分自身が少しでも成長できればと思い、日中友好大学生訪中団に応募した。

中国に対する訪中前のイメージは、テレビや新聞から得られるメディアの情報は少なく、また一部のネット検索も規制されており不安な気持ちもあった。同時に、中国由来の書道に興味があり、歴史的文化や芸術にも関心があり中国の魅力を肌で感じてみたい気持ちの方が大きかった。

済南市の山東大学の規模の大きさに驚いた。学生との晚餐会ではジェスチャーを交えたり、困った時は通訳をしてもらったり、スマホの翻訳機を使ったりしながら会話を楽しみ打ち解け合うことができた。泰安市の泰山の見学は、風が強かったけど天候に恵まれ、壮大さと大迫力の絶景に最も感動した。いつの日かロープウェイではなく、自力で泰山へ登ってみたいとも思った。泰山茶溪谷のお茶もほっとする癒しのひと時だった。曲阜市のバスから眺める赤瓦の街並みに風情を感じた。曲阜師範大学の学生と書道交流を通して共同作品をつくりあげた時は、自然と笑顔があふれてお互いの距離が縮まった気がした。また、お茶を入れたり、漢服を着たり中国の伝統文化を実際に体験できて楽しかった。青島市の高層ビルが立ち並ぶ経済が発展した都市で、日本のメーカー企業の看板や商品も見つけることができ、ハイセンスグループのダイナミックな映像技術に驚かされた。青島ビールの博物館は、アトラクションのようなわくわく感がいっぱい社会科見学の遠足気分だった。道路沿いの木が根元から保温効果と殺虫効果がある葉を混ぜて白く塗られていたり、車の動きが速くてクラクションがたくさん鳴り響いていたり、日本では見られない光景を自分の目で見て聞いて体感することができた。ホテルやお店で中国語に触れ、また周りの観光客の人たちの会話を聞くことで、少し理解することができたときは言葉の不安も緩和された。今後は、自分の言葉で会話を楽しめるように語学力を高めていきたいと思った。食事面では、普段食べることのない料理をおいしくいただけました。苦手な食感や味付けのものもあったけど、馴染みのない食材に挑戦し珍しい料理を食べることができて、新しい味覚の発見があった。一番の困ったことはトイレ事情で、トイレットペーパーの心配をしながら、日本とは異なる様式に戸惑うこともあり落ち着けず苦戦したことだ。日本で当たり前だと思っていた生活習慣の違いを理解し適応できるように慣れていきたいと感じた。

訪中を終えて、たくさんの人に中国の山東省の魅力を伝えたいと思える 6 日間だった。コロナ禍を乗り越え、新しいことにどんどん挑戦したいと思えるようになった。新しい自分になるための第一歩として失敗を恐れず積極性を身につけ、コミュニケーション能力を高めたいと感じた。中国に興味・関心が今まで以上に湧いてきたので、中国語の学習にも

力を入れ、日中の交流の機会があれば積極的に参加したい。個人ではなかなか経験できないたくさんの体験を通して視野を広げることができたので、中国を訪れることができた幸せを改めて感じた。

日中交流の原動力は日日交流から

A班 埼玉大学 呉 東校

私は初め、日中友好協会と日中民間交流をより深く知るために訪中団に参加をすることを決めた。ただ、訪中の日取りが近づくにつれ、私の中には様々な不安があった。数年ぶりに中国の地に足を踏み入れる上で、日中関係の悪化に関連するニュース報道が気掛かりだった。これから行動を共にする団員たちと交流を深められるかどうか、私にとっては大きな問題だった。

これらの不安を抱えたまま訪れた中国山東省は、私の知っている十数年前の福建の町並みに通ずるような懐かしさを残しつつ、全てが自分の想像以上に大きな変化を遂げていた。

その様子を形容するには、まさに温故知新という言葉がピッタリだろう。クラクションが飛び交い、混雑する交通だけは相変わらずだったが、歴史を尊重し、最新のテクノロジーを飛躍的に発展させている中国のスケールの大きさには、舌を巻かざるを得ない。

大明湖、孔子廟などの名勝には、歴史的な建築とその背景に刻まれた悠久の時間が流れており、新しくできた団員の友達と登頂した泰山からの眺めは生涯忘れられないものとなった。見学で訪れたハイセンスの技術も青島港の自動化された埠頭も、止めどない向上心と利便さへの追求に裏打ちされていたと感じる。

今から振り返れば、私の不安は全くの杞憂に終わったが、訪中団の活動の中で、そのように感じられた瞬間がいくつもあった。それらの瞬間は、今の私の考え方にも大きく影響を与えたと言える。

私は人前に立つことに強烈な抵抗があった、研修会で副班長に立候補した際も、とにかく裏方に徹しようと心の中では密かに考えていたほどだ。

結果的に言えば、活動の中でそのような機会を2回もいただくことになった。

まず、二日目の山東大学との交流会にて、A班の発表として、中国の大学生に対して日本に関わるクイズを出題した。この発表は、クイズの出題形式や問題を考えてくれた、班長と副班長、クイズの回答に協力してくれた団員と現地の大学生がいなければ全く成立しなかったと考える。

次に、四日目の昼食時、班長らと共に、団の皆さんの前で一言ずつコメントを発表し、その通訳を任されることがあった。震えるマイクを手に、必死に日本語を耳で追って、なんとか中国語を絞り出すように話した。何度も言葉に詰まって、挙句には対外協会の方に言葉を聞いたほどだ。私たちのコメントの時間が終わると、団長からは腹から声を出すと良いとアドバイスをいただき、対外協会の皆さんからは、よく頑張ったと励ましの言葉をいただいた。

この機会を通して、私は、あらゆる場面において、自分の学びを深めるためには、自分から行動していかなければならないことを強く実感することができた。

どちらの体験も、自分と同じように中国に関心を持って活動に参加し、積極的に中国語を学んだり、現地での交流や学びを深めていこうとする団員たちの姿勢に強く後押しをされたからこそ得られたものだ。私が積極的に行動を起こしていこうと思えたのも、一緒に行動してくれた日本の友達のおかげであるため、その出会いに心から感謝し、繋がりをこれからも大事にしていきたい。訪中の6日間はあっという間に過ぎてしまった。しかし、短い期間には、貴重な学びと発見の連続が詰まっていた。

最後に、引率をしてくださった皆さん、対外人民友好協会の皆さん、驚くほど厚い歓迎と豊かな知識と上手な日本語で親切に接してくださったバスガイドさん、日本に興味を持ち、日本語を学んでいる勤勉な現地の大学生に心から感謝を申し上げたい。

中国初の私が訪中団に参加して経験したこと

A 班 城西大学 清水 丈生

私は今回が初めての中国でしたので、今回の目標は現地の大学生と中国語で交流する、中国文化を実際に体験するという目標を持って中国に行きました。

序盤はかなり緊張していました。特に中国の入国審査は初めてでしたので、他の団員の持ち物を確認しながら行いました。初日の目的地である済南には 20 時半頃に到着しました。山東省は北京ほどではないですが中国の北にあることから、日本より寒いというイメージがありました。そのため防寒対策をしっかりと準備してきたのですが、当日の気温は 10 度程度。寒くても氷点下にぎりぎり届くくらいの気温であったため、普段の済南とは珍しく暖かかったそうです。私はコートを用意してきましたが、実際に済南に着いてみたら日本の夜の気温とあまり変わらなかったのも、あまりコートを使わなくても過ごせたことに驚きました。

済南で 1 番印象的だったのが山東大学での現地の大学生との交流です。目標通り今回現地の大学生と中国語で交流しました。初めは私の声が小さかったからか伝わりづらいところがありましたが、自信を持って声を大きめに話してみたら伝わってくれたことがとても嬉しかったです。今回集まった現地の大学生は日本語専攻学部でしたので、私が中国語で話すと日本語で返ってくると、お互い別々の国の言語で会話していたことが面白かったですし、日中関係を良い方向に向くきっかけとなると思い、感動しました。

山東大学での交流を終えて段々と緊張がほぐれていき、楽しさの方が多くなってきました。そして学生以外にも少しだけでも良いので交流したい気持ちが出てくるようになりました。山東大学での交流後、私はこの 6 日間お世話になった山東省人民対外友好協会の方々とお話をするようになりました。日本語も使いながら、少しずつ中国語での会話や観光名所の文字が何て書いてあるのかなど、色々と答えてくれました。それから、曲阜で自由時間の時に銀座ショッピングのスーパーで現地の方とお話をしたこともありました。友好的に話しかけてきてくれて、とても良かったです。

もう一つの目標である中国文化を実際に体験するには、様々な経験の得ることができました。その中でも泰山、孔子廟、青島ビール博物館訪問は特に印象的でした。孔子廟では大きな石碑がいくつかありましたが、この石碑がどのように孔子廟まで運ばれてきたのかについて聞かれました。その方法は山東省は北に黄河が流れているため、近くまでは黄河を使って運び、陸地での移動は当時今より気温が低かったため、水を地面にばらまき凍らせてから石碑を運んだそうです。周囲の環境を活かしていることに賢いと思いました。青島ビール博物館では、なぜ中国青島市にビールが生まれたのかについて初めて知るようになりました。青島ビールは 1903 年に誕生しました。当時は日清戦争の後であったため、欧米からの中国占領の時期にありました。当時山東省はドイツが租借地としていたため、そ

の経営の一環として誕生したそうです。青島は中国語だと「Qīngdǎo」となりますが、ブランド名は「TSINGTAO」となっておりこの表記はドイツ語であるそうで、今もドイツの名残があることを感じました。

最後に、今回の6日間で様々な経験を得ることができ、また中国へ行きたい気持ちが強まるようになりました。今回行ってきた山東省では済南・泰安・曲阜・青島、どれも素晴らしいところでしたが、特に済南はホテルの室内や道路交通状況など、日本とは違っていたところがたくさんあり、もう一度訪れてみたいと思いました。まだまだ言語の壁を痛感することがありましたので、次に中国に行くときには今回の訪中団よりさらに中国語で話せるように頑張ろうと思います。

「百聞は一見にしかず」とはこのことだ！

A 班 明治学院大学 杉田 愛衣子

私は大学 1 年生のときに、同じ学校の中国出身の留学生と仲良くなったことがきっかけで、中国に興味を持つようになりました。この 3 年間で例えば日中友好協会主催のスピーチ交流会に参加したり、台湾に留学したりというように、中国語学力の向上や中華圏の人々との交流に励んできました。しかし、新型コロナウイルス影響もあり、中国大陸にはなかなか行くことができず、この訪問を通して初めて行きました。

これまでは中国について人から話を聞いたり自分で調べたりして、中国は学業だけでなく就職面でも競争が厳しく、生きづらそうなイメージを抱いていました。しかし、この訪問を通して、少なくとも山東省に関しては、思うよりも時間の流れがゆっくりで、出会えた人々も、人懐っこく優しい方が多いなという印象を受けました。また、山東省と東京の体感温度も全く違い、表示されている気温よりも暖かく、過ごしやすいということも、現地に行くことにより初めて気づきました。

訪問の途中でスーパーマーケットやコンビニエンスストアに立ち寄る機会も何回かあり、そこで中国にしかない商品やお菓子のフレーバーなどをたくさん発見しました。例えば日本ではオレオはバニラ味しかありませんが、中国には抹茶味やイチゴ味、2 つの味を組み合わせたものもあり、メーカーの発想力の豊かさを垣間見ました。このことから、固定観念にとらわれず、常に新しいものを作り出したり、既存のものを更新したりしていく努力の重要性を感じました。

5 日目には青島にある有名企業を見学させていただきました。特にハイセンスでの説明を聞いて、家電生産を通して教育現場のサポートをしたり、消費者の QOL を向上させるような商品を開発したりと、社会に対し責任と明確な目的意識を持って事業を展開してきたということを知りました。日本ではただ給料のために働いている労働者も少なくないと言われていますが、自分こそは卒業後、社会における会社の存在意義や商品の向こう側にいる人々の存在を意識できる労働者になりたいと強く思いました。

このように、今回の訪問で、中国に対する認識が 180 度変わりました。訪問前は、台湾と大陸はいろいろな方面で状況が違うことから、台湾では環境に溶け込み楽しく過ごせましたが、大陸ではそうとは限らないだろうと心配していました。実際は山東に関しては自分にすごく合っていると気づきましたし、来年 3 月に北京に短期留学に行く際にまた山東省に立ち寄りたいたいと思えました。その際今回出会えた山東大学の学生にもまた会えたらいいなと思います。

また、山東大学訪問後お会いした松本さんの経験談を聞いて、私もいつか中国で働いてみたいなと思いました。卒業後就職予定の会社では、中国へ駐在に行くこともできるので、その際実際に働いてみて、その後中国の企業に転職するかどうかを吟味してみたいな

と思いました。今回の学びや気づきをスタートラインにして、引き続き中華圏の人々との交流を続けたりや語学量の向上のために努力したりしていきます。

日本の代表としての訪中で得たもの

A班 東京大学 田中 渚

私にとって、今回の山東省大学生訪中団は2度目の訪中でした。今回の訪中団で印象に残ったことが、主に二つあります。一つ目は、「客として招待されて海外に行く」ということです。この訪中団は、中国側から招待していただいて日本の大学生の代表として山東省を訪問するというものでしたが、私は今まで旅行や研修で海外に行くことはあっても（初めての訪中は今年の8月で、大学の中国語サマースクールというプログラムでした）、このようにお客さんとして海外に行くというのは初めてだったので、どういう感じなのか掴めないところがありました。正直、この訪中団に応募した最大の理由は観光したいというものでしたし、参加が決まって行程表を見たときにも「だいたい観光じゃん！」という感想でした。こんな感じにずっと旅行気分でしたのですが、事前研修の際に日本の代表としての自覚を持って行動するようと言われ、自分たちが公的な集団として中国に行くのだということを改めて実感しました。実際に行程が始まってからも、毎日省の方が団に同行していらっしやったり、個人的に旅行に行くときには絶対に選べないようなとても豪華なホテルに泊まらせていただいたり、毎日昼食でテーブルに収まりきれないほどの円卓料理を食べさせていただいたり…本当にさまざまな場面で、「お客さん」としてとても良い待遇をさせていただいているなというのを感じました。このような経験はなかなかできるものではないので、招待して下さった山東省の方々と訪中団の運営をして下さった日中友好協会の方々に感謝したいです。

二つ目は、この六日間で日本人、中国人を問わずさまざまな人たちと交流を深められたことです。私は元々この訪中団に全く知り合いがおらず、事前研修の際も個人的に話した人は1人もいなかったもので、充実した六日間を過ごせるかどうか、正直すごく不安でした。ですが、蓋を開けてみると、皆さんフレンドリーで話しやすい人ばかりで、すぐ打ち解けることができ、本当に六日間楽しく過ごすことができました。私は普段違う大学の人と関わる機会がほぼないに等しいので、大学や学年の垣根を越えて交流することができたことは非常に刺激になりましたし、良い思い出になりました。一部の人は今後会うことになると思うので、この訪中団だけでは終わらない関係を築けて本当によかったです。加えて、現地の大学生の方々とも交流を深めることができました。山東大学で日本語学部の皆さんとお話ししましたが、皆さんの日本語のレベルが高すぎてほぼ日本語だけで全ての会話が成り立ってしまうくらいだったので、本当に驚きました。一番印象的だったのは、ある山東大学生が森山団長のことを「矍鑠たる（かくしゃく、年老いても丈夫で元気な様子）」と表現したのですが、日本人学生は誰もその意味が分からず、ポカーンとしてしまったことです。なんでも先生が度々このようなどても難しい言葉を使うそうで、授業レベルの高さに感服しました。また、中国の若者の立場からは物事をどう考えている

のか、等色々な話を聞かせていただいて、とてもためになりました。

この六日間の訪中期間中、本当に充実した日々を送ることができ、様々な貴重な経験は私にとって非常に大きな財産になりました。今回の訪中団をきっかけとして、この先中国と日本の間での友好関係の維持・発展に少しでも尽力していければと思います。

これからの日中関係

A班 城西大学 程 美沙希

今回の訪中の中で、私は沢山の感動と刺激を貰いました。

私自身、父が中国出身というのもあり、今までに中国を訪れる機会は沢山ありました。しかし、いつも父や兄、現地にいる親戚や友達に頼りっぱなしで、自分の中国語スキルや中国に対しての興味も高くありませんでした。今回の訪中では、自分の知り合いのいない、自分の行ったことのない地域で6日間過ごすという、私自身初めての経験でした。

山東省は日本よりもとても乾燥していて、気温も少し低く、平地ばかりでした。街には、たくさんの自由・平等・愛国などが書かれた看板があったり、道路に馬車がいたり、日本と違うところだらけで街並みからも、改めて文化の違いを感じました。また、街並みだけではなく、現地の方々の人柄からも刺激を受けました。私の親戚に中国人が多いのですが、地域の違いからか、山東省の方々は、私の聞き慣れている中国語より少しイントネーションが違ったり、より社交的で暖かい人が多かったりと、山東省特有の違いを感じました。

今現在、日中関係は良くないのが現状で、現地の中国人は日本を、日本人を、嫌がるのではないかと心配していました。ですが実際そんなことはなく、私自身が中国に対する嫌な偏見をもっていたことにも気付かされました。

1番印象に残っているのは、中国の大学生との交流です。

山東大学では日本語を勉強しているたくさんの大学生達と交流させてもらいました。話す度に、考え方の違いや、勉強に対するモチベーションの違いなどを感じました。訪れる前は頑張って中国語で会話をしようと思っていたのですが、現地の大学生の日本語は、私の想像以上で、日本語で会話が出来てしまうほど上手だったので、あまり中国語で話す機会がなかったことだけが心残りですが、数時間という短い間で、とても心を通わせることができました。

曲阜師範大学では、書道をしたり、中国の伝統の楽器の演奏をきいたり、漢服をきせてもらったりと、中国の文化を直に感じることができました。曲阜師範大学の大学生は、日本語を勉強している学生ではなかったのですが、交流は基本英語でしたが、言語が伝わらなくても、表情やジェスチャーでほとんどコミュニケーションをとることができました。文化や言語の違いはあるけれど、交流していく中で、文化や言語の違いは全く問題ではないのだと改めて直で感じることができました。

悪化していく日中関係ですが、今回関わった同年代の中国人は、言語が伝わっても、伝わらなくても、とても私たち日本人を好いてくれていて、沢山のおもてなしをしてくれ、友好的な関係を築いてくれました。現状良くない日中関係だからこそ、私は何らかの形で、今後このような友好関係を広げていきたいと思いました。

この 6 日間の中で、訪中団の日本人大学生、現地の大学生、現地の人々、現地の自然など、出会った全てに沢山の感動と刺激を貰い、自分の物事に対する考え方や捉え方、価値観などが全て一転しました。改めて、今回の訪中団に携わっていただいた日本中国友好協会の皆様はもちろん、推薦していただいた埼玉県日本中国友好協会にも感謝しています。この度の訪中で得た経験は、これから先、生きていく中で私の財産となります。このような貴重な機会を提供していただき、本当にありがとうございました。

実際に目で見て感じた中国について

A 班 高松大学 長岡 祐生

(1) 訪中前と訪中後の中国に対する気持ち・考え方の変化

私は、今まで海外に行ったことがなく、今回の訪中にあたって初めてのパスポートを取得し期待に身を膨らませながら準備を進めた。訪中前に思い描いていた中国というと GDP が世界 2 位、人口も最近まで世界 1 位、そして世界の工場と言われていたほどのアジアの超大国というイメージであった。私の頭の中では、「中国は日本よりも都会だろうな」という勝手な想像や「その大国にはどのような人たちが生活しているのだろう」と疑問があった。

実際に中国に行ってみて、現地の人たちと触れ合ったり自然や文化に触れ合ったりする中で、感じたことは、中国人の勉強熱心さ、向上心の高さである。プログラムの 2 日目に、山東大学にて現地の大学生と共同授業を受け、その後大学の学食で歓迎セレモニーがあった。まず、驚いたことが現地の大学生の賢さと勉強熱心さである。共同授業は日本語で行われたのだが、隣の席にいた中国の学生が漢字、カタカナ、ひらがなを上手く使い分けながらノートをまとめているのである。そして、その後の歓迎セレモニーでは現地の大学生と食事をしながら会話を楽しんだ。私は英語も中国語を話すことができないので、どうしようかと心配であったが、現地の学生たちが日本語で対応してくれたため、交流することができた。その日本語も上手で、「すごいな」と感じたと同時に、「それに比べて外国語を何も話すことができない私、情けない」と思った。

現地の大学生と交流することで刺激を受けた。今は日本に帰ってきたが、これから外国語をもっと勉強していきたい。

(2) 文化・食生活について

訪中にあたって楽しみにしていたことが、中華料理を食べることである。実際に食べてみて思ったことが、「辛い、甘い、味が薄いものが多い」ということである。特に炒飯は日本の炒飯とは味付けが違い、おかゆのような味であった。また、中国料理は食器を下げるのが早く、量も多いため食べるのに必死になった。そして、現地の人たちが食べ終わった皿を片付ける際に、食べ残しや紙クズをまだ残っている料理の中に入れてのを見て、日本との食文化の違いに驚かされた。料理のマナーとして少し残しておかなければいけないという風習が残っているのかもしれない。

そして、中国は日本と比べて国土が広大なため、当然かもしれないが道路が広い。そして道を通っているのはセダンや SUV などの大型の普通車ばかりであった。5 日間中国の交通事情を見てきたが、日本よりも運転が荒い人が多いと感じた。国によって違う運転事情を知ることができた。

(3) 日本はそして自分は隣国隣人として今後どのように中国（人）と付き合っていくべきか

今回の訪中を通して中国人の考え方や向上心の高さ、文化や食生活の違い、企業見学から見える技術力の高さなど、多くのことを学び、そして今後自分がどのように生きていくかを考える機会となった。日本と中国どちらも先進国であり、世界的に見てもどちらも大きな国である。しかし、日本がこの 20~30 年経済が停滞している理由がなんとなく分かった気がする。日本人は現場の生活に満足して給料を上げる努力をしない人が多い。そして、なんとなく生きている人が多いと思う。今回の訪中で出会った中国の人たちの勉強熱心さを見習って残りの大学生活、そして社会に出てからも現状に満足して、勉強を辞めるのではなく、常に何か吸収して成長していける人でありたい。

訪中団を経て気づいたこと

A班 早稲田大学 中嶋 優理

今回の訪中団に参加させていただき、観光だけでなく、現地大学生との交流や企業訪問など個人での旅行では体験できない経験をたくさんすることができました。その中でも特に印象に残った2つの経験を紹介したいと思います。

1つ目は、現地の中国人と会話をした経験です。観光地のお土産屋さんの店主や、街中で出会った方に勇気をもって話しかけると、とても優しくフレンドリーに会話することができました。確かに今回の訪中で出会った現地大学生や、大学に留学しに来ている中国人留学生とは今までも楽しく会話をしていました。しかし彼らは、日本語を専攻していたり日本に留学に来たりしているため元から日本に友好的ですが、その一方で中国人一般的には反日派の方もいる程度いると思っていました。特に最後に訪れた青島は日本に植民地にされた過去もあるため、より反日派の方が多いという偏見を持っていました。しかし実際私が出会った方々は、私の片言の中国語をほめてくださったり、日本の漫画の話題で盛り上がりやすくなることができました。この経験から、私は無意識に一人ひとり違うはずの中国の方々を、あまり日本に友好的ではない地域の中国人と自分で作った枠組みにまとめてしまっていたことに気が付きました。そして私が気づかないうちに偏見を持っていたことに驚き、とても反省しました。この気づきは中国で実際に経験したからこそ得られたもので、人が経験した話を聞いただけでは気づくことはできなかったと思います。

2つ目は、ごはんをおもてなししていただいている時に違和感を覚えた経験です。今回の訪中団は山東省政府のご協力も得ていることもあり、毎回中華テーブルに乗りきらないほどの品数をごちそうになっていました。そのため半分以上食べきれないことが多くたびたび心苦しさを感じていたのですが、ある一人のメンバーが大量に残った料理を見て「これが中国のマナーだから」と言っていたのが私の中でとても引っ掛かりました。確かに中国にはお客さんが出された料理を残して、「食べきれないほど十分に料理をご馳走してもらい、満足した」という気持ちを伝えるという文化はありますが、それは基本的には一口程度残すものだとされています。そのため今回のように大量に残すのは中国のマナーではなく、日本人が中国の伝統を誤解してしまっているのだと思いました。そしてこの時初めて、異文化交流をする際にそもそも相手の文化を理解できていない可能性があることに気が付きました。とても当たり前のことですが、私も今まで異文化交流する際に相手国の文化を調べ直すことをしなかったことがなかったので、意外と忘れがちな点だと思いました。そして大学の友達などにも中国のマナーを誤解してしまっている子がいたら、正しく理解をするための手伝いをしたいと思いました。

今回の訪中を通して、大学に通っているだけでは得られない経験をたくさんさせていただきありがとうございました。そしてこの経験を活かすためにも家族や友達に今回得た気

付きを共有して、民間レベルで日中友好関係の促進を手助けしたいと考えました。

訪中団でできたかけがえのない仲間と共に

A 班 中央大学 野村 涼夏

2020 年コロナ禍と同時に大学生生活をスタートした身として、最後の年にこのような素晴らしい学びの機会をいただけたことはまさに念願と言わざるを得ない気持ちであると同時に、ある種の節目のような心持ちで今回の訪中に臨んだ。気軽に海外へ出かけることが難しくもどかしい 3 年間で過ごす中でも、学んできた中国語を少しでも良くしよう、役立てようという思いで、学内外の枠にこだわらずサークル活動や長期インターンシップなど、中国語や中国に関わるものには迷わず手をあげ取り組んできた。そして 2021 年に参加した日中大学生スピーチ交流会でのご縁が繋がって、今回の訪中団参加に至った。

私が日々身近な中国に関するモノ・コト・ヒトと触れ合う際に一貫して強く感じることは、各々の考え方やステレオタイプを方向転換させるためには、知識と体験と時間が必要であるということだ。メディアやそれを取り巻く大衆が作り出したイメージでは、中国という国はどちらかといえばネガティブに形容されがちだ。しかしそうした大衆の中に数人、中国に対して興味をもって積極的に接してみようとする人がいたらどうであろうか。そうした人はきっと、世間一般の人からみれば少しばかり中国について詳しくて、少しばかりユニークな体験を持っていて、少しばかり長く中国という国を見つめているのだろう。そうした人がその知識や体験を周りの人に共有したら、中国について実際のところよく知らない人の「中国」の捉え方は少しずつ柔らかなものへとなるだろう。これは私がこれまでの大学生生活を通して獲得した信念であり、今のところ自分自身の存在意義である。

今回の訪中を通して私が得たものは、同じ方向を向いている仲間の存在そのものである。山東の旅で目にした大明湖や泰山での自然の絶景、孔子府・孔子廟や文化体験での荘厳な伝統、青島港自動化埠頭やハイセンスでの目覚ましい進歩を遂げるテクノロジー、山東大学や曲譜師範大学での優秀な学生たちを支える豊富な学習資源、どれも目を見張るものがあり、目にするすべてのものから感じ取れる中国という国の奥行に飲み込まれそうなほどであった。感動や驚きの絶えない六日間で、何より支えとなりかけがえのない存在であったのは、旅の間に出会った仲間である。旅の間には、見学地の感想を即時に伝え合えただけでなく、中国に通ずる関心事や自らのバックグラウンド、将来像について熱く語り合うこともできた。生い立ちも所属も学年も異なる 40 人超が「中国」というキーワードを同じくして会し、それぞれの生き方や考え方に感化され合い、鼓舞し合い、モチベーションを高めあったことこそが、自分自身の人生を変えるほど尊く、得難い時間であったと振り返る。私の仲間は皆学ぶことに貪欲で、それは中国語であったり、中国文化であったり、伝統武術であったり、その他であったりするのだが、ユニークな存在であろうとし、そしてそんな自分に誇りを持って生きている、語らう中でそんなように感じた。

私は自分の信念に従って、まずは身の回りの人から、できるだけ多くの人に自分の中国

での体験や中国に関する学びを伝えていきたい。それは必ずしも中国を絶賛するのではないし、良い部分だけを伝えることはできないかもしれないが、私の体験談をもとに誰かの中国を見つめるまなざしを少しでも穏やかなものにできるよう行動したいと思っている。訪中団に参加するまで、自分の信念の道は時に孤独で、「中国はこうである」「中国人はこうである」というようにひとくくりにして批判的な評価を下す場面に遭遇すると、行き場のない悲しさを感じることもあった。しかし、今回中国に興味を持って積極的に関わってみようとする自分の同志ともいえる友人たちに出会うことができ、私たち一人一人が少しでも周りの人の考え方に影響を及ぼす存在になれば、いつか世間全体の「中国」へのまなざしも今よりずっと柔らかくなるだろう。そんな前向きな期待を抱かずにはいられなかった。

私はこれからも、私の存在を通して誰かの中国のとらえかたに新しい可能性をもたらすことで日中友好に貢献していきたい。2023年冬に出会った、仲間と一緒に。

最後に、大学生訪魯団実現のために大変なご尽力いただきました、森山沾一団長はじめ日中友好協会の皆様、山東省人民対外友好協会の皆様、随行ガイド・ドライバーの皆様、共に学び共に旅した42名の代表団の仲間に感謝申し上げます。

中国交流と未知

A 班 東京女子大学 本間 碧衣

今回の訪中は私にとって初めての中国への渡航であり、学びの連続であった。SNS などのメディアや書籍で得られる情報量と、実際に自分の目で見て体験することの差は、予想以上に大きかった。写真や動画、文字だけでは、自分がその場で五感を使って、見聞きして、匂いや空気を感じ、過ごしたことで得られる情報量には敵わない。毎日たくさんの未知に出会い、刺激を受け、多くのことをこの身で学んだという実感がある。日本にいれば、知るのに通常半年かかるだろう内容を、たった6日間で吸収できたことは、訪中に参加した大きな意味となった。

訪中団に参加したことで、予想以上に多様性に触れることができた。特に、団員の中に中国ルーツを持つ人々が自分が考えていた以上に多かったことである。さまざまな背景を持つ人たちと交流するなかで、これまでの自分の認識は狭いものであったことに気づかされた。これからは、多様なルーツを持つ人々のことを尊重した言動ができるようになりたいと思った。異なるルーツを尊重し、多様性を受け入れることが、さまざまなルーツや文化があるこの社会での要になると感じた。

中国の学生たちとの交流では、日本のアニメやドラマに対する興味を多くの学生がもっていたことが印象的だった。娯楽という共通の話をするのは、交友を深める手段として有効なのだを知った。また、積極的にコミュニケーションをとってくれる学生たちと出会えたことは心温まる体験となり、お互いの文化を尊重しあいながら友情を育む重要性を感じた。

この訪中により、相手の背景や文化を知ることが大切であるとの認識を深めたが、それ以上に、相手を一人の人間として尊重することの重さを痛感した。国や宗教、人種などの枠にとらわれず、人としての共通点を見つけ、尊重し合う姿勢が、この社会においても平和を築く基盤となると考えた。特に現代の情勢からは、イデオロギーによって相手を見ることで生まれる対立があると示唆されているが、相手を等しい人間として認識し、尊重することが大切であることを改めて認識した。

6日間という短い時間であったが、この訪中団への参加は私にとって非常に貴重な経験であり、人生における転換点となるように思われる。訪中における交流のなかで得た気づきや考えは、日常に深く影響を与えるに違いない。これからの日々の中で、ふとした瞬間にその思い出がよみがえり、振る舞いや態度に滲み出ることがあるかも知れない。大学生生活の終わりという時期に機会を得たことで、人生の記憶に強く残り、これからの選択を動かし得るものになるだろう。

例えば、仕事や勉強、同僚や友人との関わりのなかで、以前よりも視野を広く持ち、自分とは異なる背景を持つ相手を尊重し、理解を示すことが自分の目標となった。今回の訪

中は、その目標を実現させる大きな一歩となったことは間違いない。これからも、未知と出会って視野を広げることで、より見識を深めていきたい。

伝統と文化のあり方、現代における共存

A 班 慶應義塾大学 渡邊 佳那美

夏の北京訪中団に参加できなかった身としては、朝唐突に降ってきたゼミの教授からの案内は天意にも思えた。十数年ぶりの中国。物心ついてから、1人の「人と」して初めていく中国。私はこの訪問に、自分の中国に対する印象・見解を更新させるという目的を持って挑んだ。私と中国との今までの関わり合いには家族や友人という要素が多くあった。最後の訪問が小学生の頃ということもあり、国としての中国を意識しての滞在はなかったのである。此度の訪中を終えて、旅程の中に何度かあった「意を突かれた瞬間」を2つ取り上げたいと思う。

1 度目は初日、大明湖を訪れた時である。都市の中心に想像を絶する広さの公演を構えることはもちろんだが、私の目を引いたのは園内に点在するコミュニティの輪だった。太極拳を披露する女性達、衣装も合わせて踊る学生達、京劇の道具のようなものを誇らしげに写真を取り合う男性達…その集まりの多さに驚かれた。そこで一番に比較するのは日本である。なるほど、国土の広さはこう国民生活に影響を与えうるのか、と思う一方で、日本でこのような多種多様なコミュニティが集える場所はあるだろうか、と考えた。子供達が放課後安全かつ自由に楽しめる場所、高齢者が交流の輪を広げることができる場所作りは、治安や地域の活性化にも繋がるだけでなく日本が抱える少子化や孤独死と行った社会問題の解決の一端にもなるのではないかと思う。

2 度目は孔子廟を訪れた滞在四日目である。三国志の劉備のように、数千年も前に生きたこの人物は伝説上の人物と化しているだろう…その考えは大きく覆された。初日の山東大学中華伝統文化研究と体験基地で孔子への礼の作法を学んだときは、あくまで「伝統」の体験として教わっているものと信じていたからである。一番に感じた差異は、入場における警備体制だった。今まで訪れたどこよりも警備が厳重で、中では軍服を身につけた人も何人か見かけた。小学生の遠足集団もいくつか見かけた。中に入り、孔子の祀られている本殿まで進むと、文化研究基地で教わった孔子への礼作法を行なっている者がいる。こうして見かける現象から、「孔子」という存在が現代中国においていまだにこのような影響力を持つことに驚愕したのである。警備の厳重性はおそらく孔子廟の政治的重要性を示唆し、子供達は孔子が義務教育的深層まで至っていることを意味する。そして、伝統と私が位置付けていた礼作法の現れはそれが日常へ浸透していることを体現していた。

5 日間に渡る訪問を経て、私の中で最も更新されたと言える分野は中国の文化に対する意識である。文化大革命による大規模な損失を経て、その修復、保護、伝搬に関する活動を

目辺りにする機会は日本においてなかなかないのではないか。悲しいことに、中国の取る政策一挙一動が批判にさらされかねない世論がある。外からの目線に限らず、内側からの目線、日常的な人々への影響や生活を見ることができ、大変貴重な経験をすることができた。